様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５８２

研究課題名（和文）方言の推量表現に関する文法記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive research on epistemic modality forms in Japanese dialects

研究代表者
橋本　礼子（舩木礼子）（HASHIMOTO-FUNAKI, Reiko）

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：００４５４７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語方言の推量表現形式のうち、古典語ラムに由来する形式「ロー」を持つ地域の一つとして、山口県長門地方と島根県石見地方の方言に焦点を絞り、当該地域の現在の推量表現形式の意味や用法を老年層面接調査で得たデータによって文法的特徴を記述した。この地域では現在「ジャロー」類と「ロー」がほぼ同じ意味・用法で併用されているが、長門方言の一部に「ロー」が名詞に直接付くことが可能な地域があり、その場合の「ロー」は確認要求表現に限定されることが明らかになった。また過去の方言資料等と比較すると、長門方言・石見方言では推量表現に「ジャロー」類が主に使われ、「ロー」の使用地域が狭くなっていることが確認された。

研究成果の概要（英文）：In the Nagato dialect and the Iwami dialect, which are spoken in Yamaguchi prefecture and Shimane prefecture, has a epistemic modality word ‘-roo’. This word is derived from classical Japanese ‘-ramu’. This study describes some usages of epistemic modality words including ‘-roo’, and suggests that a syntactic change occurs to the ‘-roo’ form with a narrowing change of meaning. The area using ‘-roo’ form has narrowed and another epistemic modality word, ‘-zjaroo’, has increased.

研究分野：日本語学、方言学、社会言語学

キーワード：推量表現　方言文法　長門方言　石見方言

１．研究開始当初の背景

日本語の推量表現の変化についての研究には、大きく３つの流れがある。

１つ目は、古典語を対象に推量（・意志）表現体系や形式の変化を論じる研究である。そこでは、事態の未実現を義務的にマークする時制的な体系が、しだいに現代のようなムード的な体系（一定の意味を一形式が専用的に担う体系）に移行したことが明らかにされてきた。

また２つ目は、方言を対象に推量（・意志）表現形式が担う意味・機能の変化を論じるものである。方言資料の残る都市の方言では、推量に「ダロウ」型形式、意志にウ・ヨウ形式を用いるといった分析的傾向のあることが指摘されてきた。つまりこれらの研究で明らかにされたのは、時制的体系からムード的体系への体系変化と平行した、推量専用形式の析出という形式分化の過程である。

３つ目として、現代方言を対象に伝統形式から新形式への交替を扱うものが挙げられる。共時的調査で得た世代別データや明治以降の方言資料などから、各地の推量表現や確認要求表現の形式が「ダロウ」型（断定辞を含んだ推量表現形式）に変わりつつあるとの報告もなされている。現代標準語のモダリティ研究の成果をふまえた詳細な記述も進められている昨今だが、各方言で進む言語変化、つまり新しい推量表現形式や確認要求表現形式の取り込みに伴って、元々あった推量表現形式が使われなくなっていく現象については、そのプロセスの分析がまだ少ない。

本研究は、この３つ目の研究に位置づけられるものであり、推量表現の部分体系や使用形式が変わるプロセスの中で、具体的に生じる現象を捉えることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、古典語のラム由来の推量表現形式「ロー」をもつ長門方言（山口北部）・石見方言（島根西部）に焦点をあて、推量表現形式の意味・用法を記述することにある。またこの「ロー」は別形式へ交替しつつあるため、記述調査によって得たデータから、形式の交替が意味・用法に及ぼす影響も分析する。

最終的には、他方言のラム由来の推量表現形式について応募者がこれまで積み重ねてきた成果とも対照し、変化の要因や意味・用法の傾向などを明らかにすることも、発展的な課題として目的の一つとした。

３．研究の方法

本研究では３年の期間内に、主に次の２つの方法で研究を行った。

(1) 臨地面接調査による文法記述データの収集

長門・石見方言の推量表現形式について、老年層・中年層・若年層への臨地面接調査を実施した。これによって現在の使用状況を把握し、「ロー」の意味・用法を文法記述するための詳しいデータを得ていった。

(2) 方言資料からの用例収集

過去に記録された方言資料等を用いて、長門・石見方言の推量表現に関わる用例を集め、細かな分類を行って、推量表現の諸形式の意味・用法を確認するための基礎資料とした。

こうした方法で得たデータを元にして、これまでの研究成果と総合してラム由来形式の方言間の対照を視野に入れながら、長門方言・石見方言の「ロー」の意味・用法を記述し、「ダロウ」型など他の推量表現形式との使用状況を記録した。

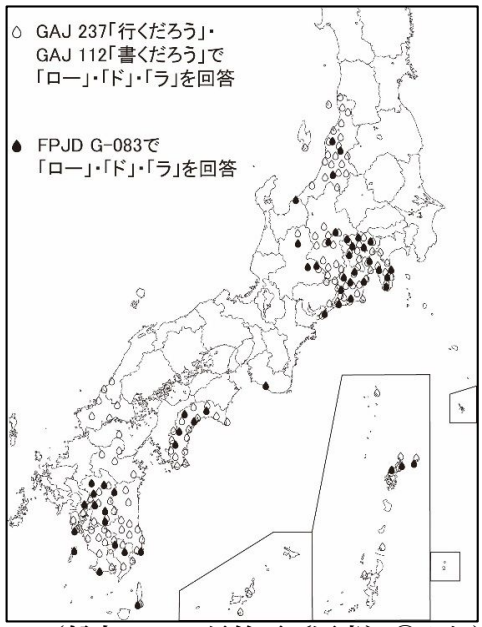
４．研究成果

本研究では次の３点について明らかにすることができた。

(1) 「ロー」使用地域の縮小

まず、方言によってはラム由来形式が徐々に衰退しつつある傾向を可視化した。次の図に示すように、国立国語研究所共同研究プロジェクトによる全国調査（FPJD、文献①）の結果では、約 30 年前の調査結果である国立国語研究所『方言文法全国地図』（GAJ、文献②③）と比較すると、ラム由来形式が回答されなくなった地域のあることがわかる。本研究はそのような地域のうちの長門・石見地域に焦点をあてたものであった。

図　「ロー」「ド」「ラ」の減少



（舩木 2017、最終頁〔図書〕②より）

全国規模の方言調査だけでなく、過去に記録・作成された方言資料や民話、方言地図（文献④など）を見ると、長門方言・石見方言の推量表現としては「ロー」の報告されていることが多い。これに対して『新日本言語地図

―分布図で見渡す方言の世界―』（文献①）では、当該地域の「ロー」が著しく減少している。

この状況を詳しく確認するために、本研究では長門・石見地域の数地点で、推量表現や確認要求表現、意志表現などに特化した臨地面接調査を実施した。その結果、長門地域においては萩市や、徳佐などの島根県境の山間部などで「ロー」が使われなくなっていることが確認できた。石見地域でも東部は「ロー」の使用が少なくなってきているようである。ただし、萩市の離島である見島では「ロー」が老年層・中年層・若年層にも使用されている状況が確認できた。

〈引用文献〉

①大西　拓一郎　編、『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』、朝倉書店、2016 年
②国立国語研究所　編、『方言文法全国地図３』大蔵省印刷局、1994 年
③国立国語研究所　編、『方言文法全国地図５』財務省印刷局、2002 年
④廣戸　惇、『中国地方五県言語地図』、風間書房、1965 年

(2) 推量表現体系の確認

古典語のラム由来といわれる推量表現形式「ロー」が、長門方言（山口北部）・石見方言（島根西部）において現在どのように用いられているかを、面接調査によって把握していった。推量表現体系（部分体系）としては現代日本語共通語と同様の体系であり、特殊な事象や古典文法的特徴などは意味の上では確認できない。専ら形式と意味との対応に関する事象であると言える。

老年層・中年層・若年層への臨地面接調査で得たデータから、当該地域では「ジャロー」類（「ダロウ」型形式）と「ロー」が併用されている状況が把握できた。また、かつてはウ・ヨウ形もこの地域の推量表現の主流であったが、現在は老年層でも推量表現の形式としてはほぼ使用しないことが確認できた。さらに、ウ・ヨウ形に関連することとしてラ行五段化した意志表現形式の使用状況も確認したところ、調査地点によって多く使用する地域と限られた動詞にしかその形式を持たない地域とがあることがわかった。

(3) 対照による「ロー」の特徴の抽出

山口県萩市須佐、島根県鹿足郡津和野町、島根県益田市の３地点（以下、須佐、津和野、益田と呼ぶ）に絞り、老年層へのより詳しい調査によってデータを集め、推量表現体系の文法記述を行った。

推量表現、確認要求表現および推量表現に関連する周辺的意味を担う形式群に関して、形式と意味との整理を行い、老年層において、推量表現形式（「ロー」および「ジャロー（ヤロー）」）と動詞の活用（ラ行五段化）との関係、否定推量表現形式との関係、意志表現との関係を詳しく調べた。その結果、全国調査では推量表現形式としての「ロー」が衰退過程にあるが、この地域の老年層は「ジャロー」類と併用し続けていること、「ジャロー」の新しい形式である「ヤロー」類は、周辺地域には見られるものの、今回の被調査者は受容していないことを確認した。また、推量には意志表現に関わる動詞ラ行五段化形は使用しないことを確認した。

一方で、確認要求表現については須佐の老年層がラム由来推量形式の「ロー」を名詞に直接後接させ、断定形式を介在させずに使用することがわかった。つまりラム由来であるために元来は動詞・形容詞にしか直接付くことのない「ロー」が、話し相手へに対する確認の要求や念押しなどといった働きかけの強い表現である確認要求表現に限って前接要素を広げるという文法的性格の変質を生じさせていると言える。いうなれば「ロー」が接続面で汎用性を広げつつあり、終助詞的な性格を得つつあるとみることができるのではないか。近隣地域で推量表現形式として「ジャロー」類が優勢であることを鑑みると、３地点とも「ジャロー」類と「ロー」をほぼ同じ意味・用法で用いているとはいえ、今後は推量表現形式としては「ロー」が衰退することも考えられる。そして須佐で「ロー」に接続の変化およびその場合の意味の縮小（確認要求表現のみ名詞直接接続の「ロー」があること）は、これらの地域で今後「ロー」が確認要求表現の形式へと専用化されていく可能性が指摘できるのではないか。

このほか、益田や須佐では推量表現にはラ行五段化形が使えず、ウ・ヨウ形に関して推量と意志とを明確に分けているように見える一方で、確認要求表現にはラ行五段化形を使う状況なども捉えることができた。

ただし確認要求表現に関わる部分体系については、詳らかにできなかった部分が残った。確認要求表現については推量形式だけでなく否定疑問形式や終助詞なども視野に入れながら今後確認していきたい。

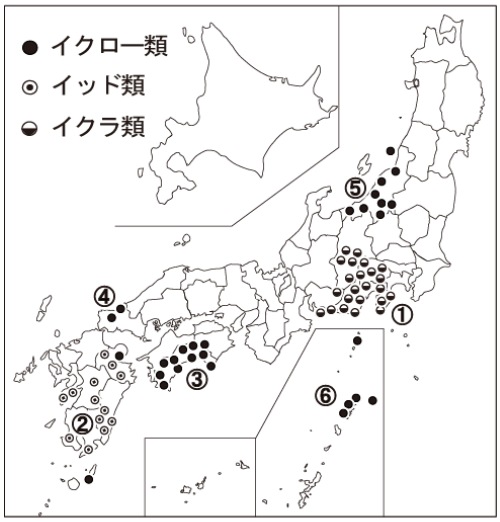
最後に、本研究の成果の学術上の位置づけとインパクト、今後の展望について述べる。

(1) 研究成果の位置づけとインパクト

日本語の推量表現に関する研究は、古典語の意味体系および形式の変遷の研究、現代語の記述的研究、および古典語から現代語に至る歴史的研究が進められてきた。ただし、現代語の全国共通語では過去推量の「行ったろう」などにツラム由来表現が化石的に残るほかはラム由来形式は見られないため、現代語としてのラム由来形式については、各地方言に使用形式の報告があるものの、それがどのような文法的性格をもち、どのような意味・用法で使われているのかは詳しく分かっていなかった。

日本の現代の諸方言においてラム由来形式が用いられているのは、次の図に示す地域である。このうち、①②③の地域は既に調査済みであり、本研究では④について調査した。

図　ラム由来形式使用地域



『方言文法全国地図』5集「行くだろう」より

これらの調査を通じて、現代の諸方言におけるラム由来形式の位置づけと使用状況が徐々に明らかになってきた。古典語（特にいわゆる中央のことば）と現代方言を直接につないで歴史を語ることは憚られるが、時空間的な何段階もの変遷をへて、当該方言の文法体系や音韻体系と絡み合いながら現代の形式と意味・用法が存在しているといえるだろう。本研究で明らかにできたのは、その何段階もの変遷のうちの、ある地点（長門・石見地域）のある一部の変化（使用状況、接続、用法の小さな変化）にすぎない。だが、パズルのピースを一つ嵌めることができたといえる。

本研究およびこれまでの研究の成果を総合的にみると、各地方言にはラム由来形式の「ロー」「ド」「ラ」などが他地域の「ダロウ」型形式と意味・用法の点でほぼ同様に用いられていることがわかってきた。

しかし全く同じというわけではない。ラムが活用語にしか後接しないという接続上の制約は多くの地点で引き継がれているものの、今回調査した萩市須佐では名詞にコピュラの介在なく「ロー」が後接する現象があることが確認できた。またその須佐の名詞直接接続の「ロー」が対人的用法である確認要求表現に限定されることは、いわゆる無変化助動詞が終助詞的なものへと形態的・統語的性格を変容させていくプロセスの解明、および意味や用法の面での変化（派生）のプロセスの解明について、重要なデータを提供できたと考えている。

(2) 今後の展望

これまでの研究では特に意味・用法のかたよりなくラム由来形式を使用しつつも、「ダロウ」型の受容や使用拡大によって確認要求表現にややかたよりつつある方言や、鹿児島方言のようにラム由来形式が疑問表現（現在推量）にかたよる方言のあることがわかっていた。今回の研究によって確認要求表現にラム由来形式の使用がかたよる方言の例が一つ増えたといえる。もちろん、各地方言の文法体系によって各形式の位置づけは異なるが、対照方言学的にこれらの現象を見渡してそのような位置づけになっている要因を追究することも今後取り組みたい。

なお、本研究で行った調査では、感動表現における推量表現形式を用いた構文の使用状況なども調べた。疑問形式と推量表現形式とによる感嘆文の構文は、疑問表現や準体助詞の発達状況との関わりもあるため複雑で、研究期間内にまとめることができなかったが、「ロー」形式が感嘆文（感動表現）や疑問文でどのように用いられているかを今後まとめていく必要を認識している。また感嘆文や疑問文に関して、現在推量の視点から他地域のデータと対照しながら考察を進めたいと考えている。

また、ラム由来形式を用いることがわかっているが、まだ詳細なデータを得ていない新潟地域（前掲図⑤）と奄美地域（前掲図⑥）についても、今後調査を実施して各方言の推量表現体系を記述したうえで、対照方言学的な分析に組み入れていくべきであろう。特に新潟地域では「ロー」形を推量表現に使わなくなってきている過渡的な状況であることが全国調査で示されている。奄美地方も、若年・中年層と、老年層との言語的断絶が懸念されるため、調査が急がれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>舩木　礼子（橋本　礼子）</u>、「石見方言・長門方言における推量表現形式「ロー」の使用状況」、『神女大国文』（神戸女子大学国文学会）、査読無、29 号、2018 年、73-58 頁(横 14-29 頁)、DOI なし、オープンアクセスではない

〔学会発表〕（計１件）

①<u>舩木　礼子</u>、「推量表現形式、意志・勧誘表現形式の分布から見えてくること―接触と対人的用法に注目して―」、公開共同研究発表会・言語地理学フォーラム（国立国語研究所）、2015 年

〔図書〕（計３件）

①小林　隆　編(小林　隆　ほか、計 15 名)、<u>舩木　礼子</u>、「語彙的感動詞の発達―高知方言の驚きの感動詞から―」、ひつじ書房、『感性の方言学』、2018 年、総ページ数 355 頁（分担執筆部分：297-321 頁）

②大西　拓一郎　編（大西　拓一郎　ほか、計 14 名）舩木　礼子、「推量表現形式の分布とその変化－地域共通形式への収斂と脱推量形式化－」、朝倉書店、『空間と時間の中の方言－ことばの変化は方言地図にどう現れるか－』、2017 年、総ページ数 346 頁（分担執筆部分：106-127 頁）

③大西　拓一郎　編（大西　拓一郎、舩木礼子　ほか、計 13 名）、朝倉書店、『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』2016 年、総ページ数 304 頁（分担執筆部分：8-9 頁、238-261 頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

橋本　礼子（舩木　礼子）
（HASHIMOTO-FUNAKI, Reiko）
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号：００４５４７３６

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者　なし